

現代の行者講における講同士のつながり : 江州飯 道山行者講を中心に

その他のタイトル	Connection between association in modern Gyoja-ko : Focusing on Goshuhandosangyoja-ko
著者	山本 拓人
雑誌名	千里山文学論集
巻	特別号
ページ	47-78
発行年	2021-03-01
URL	http://doi.org/10.32286/00022815

[研究ノート]

現代の行者講における講同士のつながり

——江州飯道山行者講を中心に——

山 本 拓 人

1 はじめに

本稿は、滋賀県甲賀市の飯道寺を拠点とする江州飯道山行者講が飯道山周辺地域において勢力を維持し、他の行者講とつながるプロセスを考察することを目的としている¹⁾。

現在、滋賀県甲賀市水口町の飯道山周辺地域では、行者講における修験道の実践がおこなわれている。本稿で対象とする行者講は奈良県南部に位置する大峰山山上ヶ岳に登拝する、いわゆる大峰講であり、修験系の講集団である。

一般的に語られる修験道において、修行を行なう修験者は、シャーマンの要素を備えた厳格な修行者というイメージが先行する²⁾。一方で、近世以降に村落に定住した修験者は里山伏（里修験）と言われる。宮本袈裟雄によると、里山伏とは、ムラびとへの祈祷やまじないなどの呪術宗教的活動をおこないながら、村落社会の一員としてムラびととともに生活している修験者のことを指す概念であるという。彼らは修験者だが、必ずしも山岳修行を重視しない。しかしながら、実際に中央の支配を受けていたことや、本来、山岳修行を旨とする修験者の世俗化し定住化した姿であると見なされている（宮本 1984）。

本稿で対象とする飯道山は、山頂にあった飯道寺が明治期に廃寺になるまで、醍醐寺三宝院を法頭とする当山派修験の正大先達寺院として勢力を保持していた霊山である。近世期には山伏村を形成し、里山伏の活動がみ

られた。

筆者が現代における修験道の調査を進めるにあたって出会ったのは、飯道山周辺の行者講に所属する修験者であった。修験者たちは白装束の山伏姿をして採燈護摩などの修験道儀礼に参加し、日常の活動はすべて修行であるという認識をもっていた。しかしながら、ムラの住民への直接的な呪術的活動は見られず、住民も求めることはない。さらに、行事後の直会では、白装束の山伏姿のまま、酒を飲む。我々と同時代に生きる修験者たちは世俗的であり、そして行事では、宗派が異なる複数の行者講がサポートしながら活動をおこなう姿がみられたのである。

鈴木正崇によると、現代の山岳信仰は、近年の文化遺産の指定などの影響で「伝統文化」として読み替えられてきていることや、少子化・高齢化による担い手の減少の問題から神仏分離以来の大転換期にあるとされている（鈴木 2015：32）。山岳信仰の中でも修験道の研究史は膨大な蓄積があるが、その多くは近世以前に視点を当てたものであり、現代に焦点を当てたものはまだ十分な議論の蓄積があるとはいえない。修験道研究において議論されてきた修験道の概念で現代の修験道を語るのは問題があるように思われる³⁾。

一方で、講集団は櫻井徳太郎をはじめ、民俗学や社会学、宗教学など多方面から議論されてきた。櫻井は、講とは宗教・経済・社交上の目的を達成するために志を同じくする人々の間で組織された任意の社会集団の一種であると定義しているが（櫻井 1962）、櫻井が研究対象とした、かつての講集団は、血縁性・地縁性が強かったということがあげられるのに対し、現代の講集団は、現代社会が村落共同体やイエ同士のつながりが希薄になりつつあることから、天田顕徳は、現代の講は2000年代以降、「文化的価値」を持つものとして、地域に限定されず、動機や所属の異なる人々と宗教を結びつけるような磁場となっていると論じている（天田 2014）。これは、現代の講が、講員の高齢化などの要因から活動可能な人数が減少し、地縁性が減少しつつあることを示唆している。

講研究は民俗学をはじめ、宗教学や社会学などの隣接分野も参照して研

究が蓄積された。そして、現在の講研究の指標となるのが、櫻井徳太郎が1962年に著した『講集団成立過程の研究』である。その後、民俗学では、地域社会との関連を視野に入れた研究や、講の実態分析に力点が置かれた。その中でも、山岳信仰、寺社信仰との関連において講を捉える研究は成果が著しい。

しかし、このように民俗学において講研究は古くからのテーマであるものの、近年は主流の研究となされていない。現代の講集団は、農山村の衰退、高齢化のような社会構造の大きな変化によって講そのものが消えつつある現状がある。櫻井徳太郎は、講の性格について、以下の分類をおこなっている（櫻井 1962）。

- ①信仰的な集団としての講。
- ②経済的な集団としての講。（頼母子講のように相互扶助的に助け合う性格を持ったもの）
- ③社会的な機能を備えている講。

信仰的な集団としての講の事例として、代参講があるが、本研究で対象とする行者講はこの信仰的な集団としての講であるといえる。この代表的なものとして他に伊勢講がある。代参講としての伊勢講の講員資格としては、一般に戸主と限定するところが多い。また地縁性も強く、さらに宮座などの組織は階層的同族的な構成をもっている（櫻井 1962：54-56）。一方で、参拝することを目的として組織された代参講は加入が任意であるものが多い。特に半分職業的な宗教者が中心となってつくる講は、地縁集団を越えて大規模な組織へと発展することもあるが、永続性が少なく、たえず動揺している（櫻井 1962：249）。行者講はこのような、個人の信仰上の動機が大きく影響し、地縁集団を越えやすい性格を持っていると言える。

櫻井が研究をおこなった頃の講集団は、現在よりも、血縁性・地縁性が強かったということがあげられる。しかし、現代は、村落共同体やイエ同士の「つながり」が希薄になりつつあるように、社会が変容した現代社会であるからこそ、講が存続することの意義、その講を研究することの重要性が十分にある。

近年、講研究が再注目されている中で、長谷部八朗が2011年頃に「講研究会」を立ち上げ、その成果が、2013年より『「講」研究の可能性』としてⅠ～Ⅲのシリーズ本として出版された。また、書評も宗教学や歴史学、民俗学の立場から書かれている。長谷部が講研究会を開いた狙いは、農村社会よりさらに多様な領域に広がる講の具体相を探り、その上で、櫻井の所説を再考することであった（長谷部 2013）。長谷部は、櫻井の講研究の中核には、「講的人間結合の本質」の解明があると捉えて、講という形にとらわれない人間結合の解明という論点を見出しているのである。そして、現在存続する講の実態分析をおこなうことで、講を存続させている要因を探っている（長谷部 2013）。

こうした問題意識から、本稿では行者講の年中行事を分類し、行事の中で講同士がどのようにつながりを構築していくのかを分析していく。

なお、本稿の事例は筆者が2018年12月～2020年1月に滋賀県甲賀市水口町の飯道山周辺地域でおこなった現地調査に基づく⁴⁾。

2 飯道山周辺における行者講の活動

2.1 飯道山の修験道

飯道山の修験道は飯道山の頂上付近にあった飯道寺が明治期まで絶大な勢力を保持していたにもかかわらず、史料の現存が不十分であることから、研究史の蓄積が十分であるとはいえない。飯道山の修験道に関しては、満田良順が1975年に『近江地方史研究会』、1978年に五来重編『近畿霊山と修験道』に報告しているが（満田 1978）、飯道寺に関する史料を整理したことに過ぎない。

飯道寺は、梅本院、岩本院、古庵室、水本院、鳥居院などの諸坊が集まった寺院であった。中世には修験道組織の一派である当山派修験道の中で、岩本院、梅本院は当山派三十六先達内を大峰山内で統括する正大先達寺院の地位を有していた。また、飯道寺修験は熊野三山とも関わりがみられる。近世には飯道寺修験を飯道山麓の水口・甲南・甲賀町周辺のムラに

いた「里山伏」が在地で支えていた。里山伏は各地に配札をおこない、これが甲賀地域の製薬や配置売薬につながっている（甲賀市史編さん委員会2007）。

2.2 江州飯道山行者講の活動

(1) 歴史と変遷

飯道山山頂の飯道寺が廃寺となり、明治25年（1892）に麓の本覚院が飯道寺の寺号を継承してから、住職を先達として飯道寺行者講が再建され、飯道寺を中心に飯道山や大峰山・熊野三山への登拝が続けられてきたが近世期のような飯道寺の権威を取り戻すことはできなかった。その後、太平洋戦争中に消滅状態となっていた飯道寺行者講を行者講復興の気運が高まった昭和26年（1951）に飯道寺の住職であった永田氏を中心に準備が進められ、飯道寺の本山である比叡山延暦寺の支援を受けて昭和27年（1952）9月に先達会議を開き、江州飯道山行者講として再興した（梅田他 1989：47-48）。そのときに作られた江州飯道山行者講の綱領は以下の通りである。

1. 私達修験者は飯道大権現と役行者神変大菩薩より、お力を頂き強い信念を培い飯道山の興隆に努めます。
2. 私達は常に奉仕の精神に徹し、謹んで自己の完成に努めます。
3. 私達は真実と誠意をもって郷土のために尽くす人となります。

この綱領は、現在は毎年1月13日の年頭祈願祭と称す行者講の総会で、講員代表によって誓願される。江州飯道山行者講は1985年頃に比叡山延暦寺直属の行者講となっている。

2019年1月の時点では、講員数は61名である。講元は飯道寺の兼務住職が担っている。なお、飯道寺の兼務住職の所属は甲賀町滝にある龍福寺である。江州飯道山行者講の講員は拠点である飯道寺の所在する三大寺に最も多く分布している。また、飯道山から水口町中心部の集落にかけて講員が広がっている。講員は拠点の寺院がある、水口町三大寺のみに限らないが、甲賀市以外の講員は見られないところに特徴がある。

江州飯道山行者講の年中行事の中で、重要視されている行事は2月におこなわれる寒中托鉢、8月におこなわれる柚川夏祭り（戦没慰霊・川施餓鬼法要）、11月3日の飯道寺笈渡し祭、そして、最も重要といえるのが、7月末～8月初旬に1泊2日でおこなわれる大峰山登拝であろう。

江州飯道山行者講の初期の史料はごくわずかである。その中でも、金奇山飯道寺の総代であった中西新二氏が執筆し、金奇山飯道寺から出された『修験道金奇山飯道寺』に初期の江州飯道山行者講における年中行事の記録がある。それによると、昭和27年（1952）では、「年中行事として、年頭総会の開催、寒中托鉢巡行、飯道寺春秋季大祭、応其木食上人墓前祭、大峰山登拝、岩壺不動尊法要、戦没者英霊並各家先祖盆供養法要及灯笼流し執行また、その他の出仕として、飯道寺笈渡し祭並採灯大護摩供、庚申山広徳寺笈渡し祭、宮町大日寺護摩供、三雲竜王山大日不動尊祭典、水口古城山阿迦之宮例祭、水口片添不動尊祭典、水口聖徳太子講法要、八日市太郎坊火焚祭、若狭神宮寺お水送り祭等がある」という記述がある（梅田他 1989：49）。前半の年中行事においては現在も主要行事として続けられている。また、出仕に関する年中行事では、宮町大日寺護摩供、三雲竜王山大日不動尊祭典の2つの行事が、現在は江州飯道山行者講の年中行事としては消滅している。

また、昭和40年（1965）に江州飯道山行者講総本部が記録した『江州飯道山行者講の経歴書』によると、昭和31年（1956）に「八日市市西照寺護摩奉修 八日市市浜野、西照寺節分会護摩要請あり出仕する」とある。また、昭和35年（1960）には「多羅尾水難者7回忌法要 多羅尾水難者7回忌を迎へ信楽仏教連合会の協力を得て多羅尾小学校校庭で慰霊祭法要を営む」とある。これは江州飯道山行者講の再興時にはなかった行事が、依頼によって江州飯道山行者講がサポートしている事例である。しかしながら、現在の年中行事ではおこなわれていない。多羅尾集落内では、初盆の盆行事による連携の変容がありイエ同士の付き合い提携が見られるようになったため（湯 2016：49）、江州飯道山行者講のサポートが不要になったと考えられる。

講員への聞き取り調査によれば、年頭総会において年中行事の予定を配布するようになったのは10数年前であるという。ある講員が2012年に記録した「平成24年度飯道山行者講年中行事予定」によると、1月、7月、10月に三雲大日大聖不動明王の例祭がある。2012年においては、江州飯道山行者講の再興時から三雲竜王山大日不動尊の祭典が続けられていたことがわかる。現在までの調査で明らかにすることはできなかったが、2012年から2019年にかけて三雲竜王山大日不動尊の行事が衰退し、それに伴って、三雲不動講の活動はなくなったといえる。

(2) 大峰山登拝

大峰山登拝は、8月の初旬に奈良県吉野郡天川村洞川でおこなわれる行者祭にあわせて1泊2日でおこなわれている。講員への聞き取り調査によると、戦前の代参講が存続していたときの人生儀礼としての大峰山登拝は飯道山周辺の水口町から洞川までバス数台で向かい、奈良県天川村洞川の女人結界門から大峰山山上ヶ岳に登り、吉野へ降りたという。しかし、近年では女人結界門から大峰山山上ヶ岳に登拝し、大峰山寺に登拝してから、そのまま女人結界門のある天川村洞川に降りてくるようになったようである。

筆者は2019年7月31日～8月1日の大峰山登拝に同行し、参与観察と聞き取り調査をおこなった。大峰山登拝への参加方法としては、7月上旬ごろに各講員に「大峰山入峰修行の案内」が配布され、各地区の組長に申し込み書を提出する。以下、参与観察によって得られた、登拝の流れを記述する。

参加者は、筆者を含めて13名であった。なお、2019年は例年の日程より早く、また、平日であるため、参加者が例年より少ない。参加者は江州飯道山行者講以外に、講員の紹介で行者講に入っていない者が含まれている。その中でも、数年前より、甲賀市に所在する建設会社から数人が講員の紹介をきっかけに大峰山登拝に参加するようになってきている。毎年、滋賀交通のマイクロバスで、例年同じ運転士が担当する。会費は23000円であったが、大峰山登拝後のおこなわれる龍泉寺の採燈大護摩による護摩料1000円

を参加者が支払う。7月31日は参加者と一部の参加しない講員たちが5時30分に飯道寺に集まり、行者堂前で、法螺師による願文と参加者による般若心経、飯道大権現など、安全祈願の真言が唱えられ、飯道時を出発した。参加者の13名は、7名が講員、4名が建設会社の社員、1名が講員の紹介で数年前から大峰山登拝のみ行者講の活動に参加している者、そして筆者であった。4名が建設会社の社員は、甲賀市水口町に本社を置く建設会社である。数年前に、江州飯道山行者講の総務である講員の紹介で大峰山登拝のみ参加するようになった。それ以来、大峰山に登拝したことがない社員は新客として江州飯道山行者講に同行し、西の覗きや裏行場を経験するのが慣習となっているという。江州飯道山行者講の講員は、「このような繋がりでどんどん大峰山登拝に参加してもらって、講員数を増やしていかなあかんねん」と言う。

10時半頃に、女人結界門をくぐる。ここで、80歳代と70歳代の講員2名が責任者として洞川に残留した。はじめて大峰山に登拝する行者を「新客(しんきゃく)」といい、2019年の江州飯道山行者講大峰登拝における新客は、建設会社の3名と筆者であった。例年であれば、旅館所属の山先達が洞川から山頂の大峰山寺まで修行場を案内するのだが、今回は、山先達と都合が合わなかったという。行者講で大峰山に登拝する場合、新客は修行場である「西の覗き」と「裏行者場」を経験するのが慣習となっている。西の覗きと裏行場は先達がいなければおこなうことができない。そのため、山先達がないので、西の覗きと裏行場においては、大峰山寺専属の御師に依頼する。御師は西の覗きや裏行場を依頼した行者講の行者が修行場にたどり着くと、大峰山寺から降りて来る。なお、それぞれの行場の費用として2000円が支払い、修行をおこなう。本来であれば、行者講はまとまって登るのが鉄則であるが、登拝後の龍泉寺での採燈護摩の時間が決まっているため、新客3名と40代の講員1名が他の行者講員より先に大峰山寺に登拝した。途中、他講の行者と山中ですれ違った際には「よお、お参り」や「おまいり」という言葉が交わされた。大峰山寺の御師は、西の覗きにおける修行を執行する際の注意点として「心配や不安は一切切り捨てるよ

うに、信じて身を預けて下さい」というのである。また、裏行場では修行をする際に足をかける位置などを指示し、新客はそれに従う。さらに、裏行場に祀られている不動明王や地藏では、立ち止まり、新客は御師に合わせて真言を唱える。その後、大峰山寺の境内での聞き取り調査で御師は、「近年は、行者講以外にも個人で西の覗きをする人も増えている」と語った。また、「都会の講では、若い人も増えていて、行者講以外のトレッキングなどで登拝する人は年配者が多いイメージだ」という。下山してから龍泉寺でおこなわれた採燈護摩では、講員以外にも護摩の結界内に入ることが許され、龍泉寺の札を持ち帰るのである。

洞川の旅館では、講によって旅館が決まっている。江州飯道山行者講は、当初より、西義旅館とさら徳旅館を利用している。調査時においても6名と7名で、2つの旅館に分かれて宿泊した。講員への聞き取り調査から、西義旅館は、現在の江州飯道山行者講の講員のうち、杣川より貴生川側の講員で構成され、さら徳旅館は、杣川より飯道山側の講員であるという。2019年の大峰山登拝の際は、6名と7名に分かれての宿泊であったが、かつては20名ほどが1つの部屋に宿泊したという。そのため調査時においては広すぎる部屋であった。ここから推測できるのは、江州飯道山行者講は、杣川より飯道山側の飯道寺行者講と杣川より貴生川側の神変講が大きな力を持っていたということであろう。そのため、後に記述する貴生川地区の行事である杣川燈籠流しにおいて江州飯道山行者講が主催で行事を遂行してきたのではないかと思われるのである。宿泊中に部屋に売りに来る陀羅尼助商店が姿が見られたが、これは各旅館に、担当する陀羅尼助商店が決まっており、行者は講員や家族、友人に陀羅尼助薬を買って帰るのである。旅館において夕食などでは、行者講員は酒や喫煙を楽しみながら、世俗的な会話が見られたのである。

2日目の8月1日は、吉野の金峯山寺蔵王堂へ参拝し、吉水神社、如意輪寺を回って飯道寺に戻った。このルートは毎年、変更されるという。

2日間における以上の調査での参与観察により、江州飯道山行者講の大峰山登拝は修行の要素より、むしろ観光や日々の採燈護摩での用具を揃え

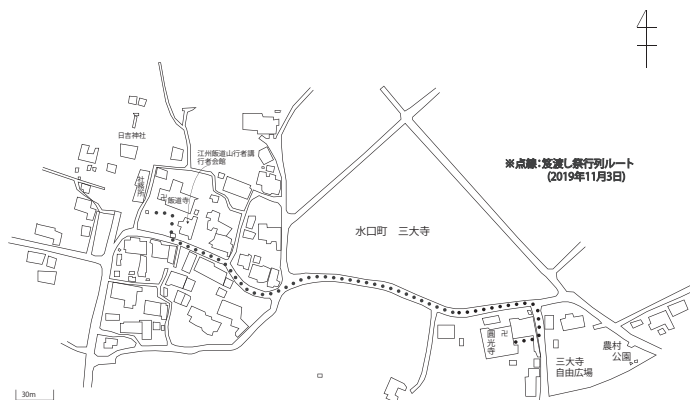
るという目的が強く表れているのではないかと推測できる。

(3) 笈渡し祭

平安初期以降、飯道山の修験者は熊野及び大峰山の管理を担っていた。6月から8月頃にかけて先達が笈の中に役行者の霊と山開き山閉じの鍵を納めて大峰山から熊野へ奥駆修行をした。そして先達は山を閉めてから飯道寺に帰ったときに飯道権現社の前で採燈護摩をおこない、帰山の報告をし、笈を次年度の当番院に引き継ぐ笈渡しの儀がおこなわれたという（梅田他 1989：19）。

明治期の神仏分離令によって飯道寺が廃寺となり、明治25年（1892）に本覚院が寺号を復興した際に新暦の10月5日を三大寺地区の秋祭りとしての笈渡しの行事をおこなうことになった。しかし、10月5日は秋の農繁期と重なるので、現在の11月3日におこなわれるようになっている。

現在の行事は飯道寺から圓光寺に笈を取りに行き、笈を飯道寺に持ち帰るという内容である。なお、笈は通常、飯道寺に保管されている。圓光寺は浄土宗の寺院である。圓光寺と飯道山の修験道は直接的に関係はないが、現在の笈渡し祭は形式のみであって、圓光寺から笈を渡すことになっているという。



図表1 笈渡し祭行列ルート（地理院地図電子国土 web を元に筆者作成）
〔2019年11月3日筆者調査〕



写真1 飯道寺に継承されている笈（2019年11月3日筆者撮影）



写真2 圓光寺から飯道寺へ笈を渡す行列（2019年11月3日筆者撮影）

2.3 飯道山周辺の行者講

飯道山周辺において江州飯道山行者講とサポート関係がある行者講は、水口徳栄講、水口龍王講、近江岩上講、江州飯道山行者講信楽講である。これらの4つの行者講は現在も積極的に活動し、江州飯道山行者講と同様に年中行事において、採燈護摩や大峰山登拝をおこなう行者講である。また、江州飯道山行者講は講員数の変動は大きな差が見られないが、他講においては江州飯道山行者講よりも減少が見られる。

現代の行者講における講同士のつながり

信仰組織	活動地域	拠点寺院	成立～現在の状況	所属宗派
江州飯道山行者講	甲賀市水口町若狭、比叡山	飯道寺	昭和27年成立～現在 (講員61名)	比叡山延暦寺 直属天台宗
水口徳栄講	甲賀市水口町(旧水口町)	龍泉寺	水口行者講から分岐 大正8年成立～現在 約50人の講員	真言宗醍醐派
水口龍王講	甲賀市水口町(旧水口町)	龍泉寺	大正9年に徳栄講から分岐 約50人の講員	真言宗醍醐派
近江岩上講	水口町今郷安土	竹林院	昭和25年成立 講員11人	天台宗
江州飯道山行者講信案講	信楽町宮町	不明	江州飯道山行者講から分岐	天台宗

図表2 飯道山周辺の行者講（聞き取り調査を元に筆者作成）



図表3 飯道山周辺の行者講講員分布 江州飯道山行者講、水口徳栄講、水口龍王講、近江岩上講（『甲賀市史』第8巻に筆者加筆）

図表3のように、飯道山周辺の行者講の講員分布は、例えば江州飯道山行者講の講員が近江岩上講の講員がいる地区にいないように、他講の範囲と交わっていない。

(1) 水口徳栄講

水口町中心部における水口徳栄講と水口龍王講の講員分布は、両行者講だけを見たとときに、例えば、隣のイエが水口徳栄講で、前が龍王講のように混在している。講員への聞き取り調査によると、水口徳栄講と水口龍王講は元来、水口行者講という名称の行者講であった。講の資料は残っていない。水口行者講は、水口中心部である旧水口町に分布していたという。かつては、かなり講員数が多く、水口行者講は100名を超えていた。大正8年頃を境に水口行者講は水口徳栄講と水口龍王講に分裂したという。

水口徳栄講は大正8年成立の真言宗醍醐派の行者講である。2019年度が創立100周年記念であった。拠点は奈良県天川村洞川にある龍泉寺である。講元によると、かつては、水口町京町にある龍王山大岡寺の行者堂を拠点にしていたという。龍王山大岡寺は天台宗の寺院である。昭和60年頃までは大岡寺の境内で採燈護摩をおこなっていた。その後大岡寺は寺院経営が困難であったことから、水口徳栄講は龍泉寺を拠点とする行者講になったのであろう。約100年前に、水口行者講が水口徳栄講に分かれる際、当時講員であった、池ノ内徳治郎の徳の文字をとって水口徳栄講としたのだという。

講員は講に属することで先達資格を得ることができる。水口徳栄講では、先達の資格にふさわしいと思われる講員を行者講内で推薦する。推薦先は拠点である龍泉寺である。正確な規定はないが、講員は、先達の資格を得ようとするならば、最低3年間の大峰山登拝が必要とされている。3回大峰山に登ってから4年目に小先達の資格を得ることができる。その後、中先達は10年、大先達は20年である。また、申請する際に水口徳栄講や龍泉寺での試験は必要ない。

また、毎月7日に「おつとめ」と呼ばれる行事がおこなわれている。7日は役行者の命日とされているためである。講の長である講元を含め9名が毎月当番制により、講員の家でおこなわれる。9名は講の役員である。このおつとめ行事は、江州飯道山行者講では見られない行事である。

(2) 水口龍王講

水口龍王講は、上記で述べた水口徳栄講と同様、かつては龍王山大岡寺を拠点としていた。講員からの聞き取り調査によると、水口徳栄講と分裂する際に、水口龍王講は大岡寺の寺号である龍王山の名称をとり、水口龍王講と呼んだという。

水口龍王講では、新しい講員が講に入っても、すぐに山伏の袈裟を着ることはできないという。一方で、講に入って1年修行をすれば2年目に龍泉寺に小先達の資格を申請できるという。修行というのは、6月におこなわれる大峰山登拝に参加することはもちろんのことであるが、年中行事に積極的に参加することが条件であるという。3月と9月に水口龍王講が中心となって管理する片添不動尊でおこなわれる例祭に主催講の講員として参加することは必要である。2年目で、小先達の資格を得ることができれば、山伏の袈裟や法螺貝を身につけることの認可がおりるのである。なお、山伏が身につける袈裟や法螺貝は講員各自が自費でそろえる。先輩の講員から譲り受ける場合もあるというが、自費でそろえようとすれば、最低10万円ほどかかるという。これらは、6月の大峰山登拝で、洞川の旅館に宿泊する際に、土産店で購入するか、ネットで購入する場合が多い。

(3) 近江岩上講

近江岩上講は、昭和25年（1950）に成立した講で、本山である護持院は、奈良県吉野郡吉野町にある竹林院である。甲賀地域において、竹林院を護持院としているのは近江岩上講のみとなっている。なお、講の大本山は金峯山寺である。講の伝承によれば、昭和25年（1950）に竹林院派である、松阪の講に属していた行者が布教してきたことにより岩上講ができたという。

近江岩上講では「講員数の減少により、あちこちの行事にいくのをやめよう」という話し合いがおこなわれている。

(4) 江州飯道山行者講信楽講

江州飯道山行者講信楽講は、主に甲賀市信楽町宮町を中心として活動する行者講である。水口町の行者講員からは「信楽講」や「信楽飯道寺講」

などと呼ばれている。かつては水口町三大寺を拠点とする江州飯道山行者講の同一の組織であったというのが、具体的な時期などは資料や聞き取り調査からは明らかにできなかった。講元によれば、元来、信楽地区には集落ごとに大峰山へ登拝する行者講が存在したという。大先達の資格をもった行者がたくさんおり、大先達の家で行事をおこなっていたという。しかし、そのような大先達の資格を持った者が減ってきた。行者は世襲制であり、父から長男に口承していく習俗があったが、現在は衰退しつつある。口伝で伝わってきたので史料に残らない。江州飯道山行者講信楽講は信楽町宮町の行者講が元になっていると考えられる。そのため、人を集め、大峰山に連れて行くことが行者講の大きな目的となっている。さらに講の特徴として娯楽の要素がかなり見られ、講員は行事の後におこなわれる直会を楽しみにしているという。

江州飯道山行者講信楽講は講員名簿を作成していない。講元によると、信楽町宮町に住む人々はほとんど講員のようなものであると言う。講に属するための会費などは徴収しない。そのかわりに、飯道神社の例祭でのお供えをすることになっているという。飯道神社は現在、宮町地区の氏神となっている。

3 年中行事における講同士のつながり

(1) 年中行事の分類

年中行事のほとんどは採燈護摩供である。当山派、本山派を問わず修験道においては供養、祈祷、修行の際に護摩を焚く。護摩には屋内でなされる檀護摩と、屋外の庭檀護摩の2種類があり、屋外の庭檀護摩においては、当山派では柴燈護摩、本山派では採燈護摩と表記する（修験道修行大系編纂委員会編 1994）。

図表4は江州飯道山行者講、水口徳栄講、水口龍王講、近江岩上講、江州飯道山行者講信楽講の年中行事をまとめたものである。江州飯道山行者講の年中行事が他講の年中行事と比較して圧倒的に量が多いことがわかる。

また、これらの行事に関して、江州飯道山行者講を中心に分類すると以下の5つになる。

- (a) 江州飯道山行者講が主催である行事
- (b) 江州飯道山行者講がサポートする行事
- (c) 比叡山延暦寺からの要請で派遣される行事
- (d) 主催講がなく、共同でおこなう行事
- (e) 江州飯道山行者講が関わらない行事

年中行事の中で、最も複数の行者講が共同で行事をおこなっているのは、3月26日におこなわれる片添不動尊例祭、4月17日におこなわれる古城山阿迦の宮例祭であり、江州飯道山行者講、水口徳栄講、水口龍王講、近江岩上講の4つの行者講が行事に関わっている。(a)の江州飯道山行者講が主催する行事は、第2章で、岩壺不動尊例祭や柚川灯笼流し・戦没者慰霊施餓鬼を述べたが、10月と11月には「JR ふれあいハイキング」や「貴生川小学校」の総合学習としての飯道山ハイキングがおこなわれており、飯道山観光協会などが関わり、行事がおこなわれる。これらの行事において、江州飯道山行者講の講員は飯道山を案内する先達の役割を担う。観光客や地域の小学生に飯道山の歴史を紹介するのである。2つの事例では、江州飯道山行者講が地域の観光を促進する性格を持つといえる。(b)は、江州飯道山行者講がサポートする行事である。岩根山善水寺笈渡会は善水寺が主催する採燈護摩供であり、江州飯道山行者講と水口徳栄講が参加し、採燈師は善水寺の住職が担当する。蓮華寺聖徳太子講護摩供は、水口町松永にある蓮華寺の年中行事である。蓮華寺は水口太子堂蓮華寺と呼ばれ、浄土真宗高田派に属し、寺号は水口山である。古くは天台宗に属していたという。この行事は、蓮華寺の聖徳太子講の主催であるが、採燈護摩供は水口徳栄講と水口龍王講が各年で当番にあたり、採燈護摩供を主催する。しかしながら、筆者が調査をおこなった2019年8月21日の行事においては、水口龍王講が主催講の当番であったが、行事に集まった水口龍王講の講員が少なかったことにより、水口龍王講の講員が、江州飯道山行者講の講員に、「今年は龍王講の参加が少なすぎるので、すみませんけど飯道山行者講に

やってもらえませんかねえ。やり方は飯道山流でかまわへんの。」という会話が見られ、江州飯道山行者講が指揮、経頭する姿が見られたのである。

毎年12月の第1日曜日におこなわれる滋賀県東近江市小脇町の太郎坊宮お火焚大祭は、太郎坊宮（阿賀神社）が主催でおこなわれる行事であるが、採燈護摩供は京都敬信講が主導する。筆者は2018年12月2日と2019年12月1日に行事の参与観察と聞き取り調査をおこなった。太郎坊宮お火焚大祭の採燈護摩供に参加した行者講は、『赤神山太郎坊宮令和元年お火焚大祭出仕者名簿台帳』によると、京都敬信講、江州飯道山行者講、水口徳栄講、園田不動講、願成就寺不動講、大塚町行者講、江州日の出講、園田不動講、地藏会、聖徳講、光授会、妙心講であった。

この太郎坊宮お火焚大祭、行事の最後に火渡り儀礼がおこなわれる。この儀礼は主に、参拝した観光客が参加するのであるが、これを目的として、地元の東近江市小脇町の住民以外にも北陸などのさまざまな地域から約1000人の観光客が訪れるのである。観光要素が強い行事であり、関西圏のさまざまな行者講が太郎坊宮と京都敬信講によって呼ばれ、参加する。このように、行者講員同士のつながりが構築され、サポート関係ができていくと考えられるのである。

(c)の比叡山延暦寺からの要請で派遣される行事は主に江州飯道山行者講が比叡山延暦寺直属であるために、江州飯道山行者講員のみが活動する。(c)に分類される行事は3月2日におこなわれる若狭神宮寺お水送りと3月13日におこなわれる比叡山延暦寺世界平和祈願祭である。江州飯道山行者講の講員の話によれば、若狭神宮寺お水送りにおいてかつては滋賀県米原市にある伊吹地区の行者講がサポートしていたというが、比叡山延暦寺からの依頼により江州飯道山行者講がサポートをおこなうようになったという。一方で、比叡山延暦寺世界平和祈願祭では、千日回峰行を終えた、北嶺大先達大行満大阿闍梨による加持祈祷がおこなわれる。北嶺大先達大行満大阿闍梨とその他複数の回峰行者が祭場に入場する際、江州飯道山行者講の法螺師が法螺貝を吹きながら先導する役割を果たしている。江州飯道

現代の行者講における講同士のつながり

月	行事	飯	徳	龍	岩	信	行事分類
1月	比叡山延暦寺 新春 年賀式	●					c
	寒中托鉢打合会	●					a
	飯道山行者講念頭祈願祭(総会)	●					a
	山上庚申広徳寺 護摩供	●	●				b
	三大寺 岩壺不動明王 初護摩供	●					a
	寒中托鉢打合会	●					a
2月	寒中托鉢修行 水口・甲南・甲西の各町	●		●	●		a
3月	若狭神宮寺お水送り 大護摩供	●					c
	比叡山 世界平和祈願 大護摩供	●					c
	水口町波濤ヶ平 片添不動尊春季例祭 護摩供	●	●	●	●		b
	岩上山 護摩供			●	●		e
	寒中托鉢反省会	●					a
4月	安土 福之島弁財天 護摩供				●		e
	水口町古城山 阿迦の宮例祭 護摩供	●	●	●	●		d
5月	飯道山 飯道神社春季例祭 護摩供	●				●	b
7月	水口町 秋葉神社 例祭		●	●	●		e
	湖南省 岩根山善水寺笈渡会 護摩供	●	●				b
8月	杉江夏祭り 戦没英霊・各家先祖の川施餓鬼法要 大護摩供	●	●	●			a
	水口町蓮華寺 聖徳太子講 護摩供	●	●	●			b
9月	水口町宇川 栄昌寺 護摩供	●					b
	岩上山 護摩供			●	●		e
	木食応基上人墓前法要飯道神社秋季例祭 護摩供	●				●	b
	三大寺 岩壺不動明王 護摩供	●					a
	水口町波濤ヶ平 片添不動尊秋季例祭 護摩供	●	●	●			b
10月	貴生川小学校 飯道山ハイキング	●					a
	飯道山 JRふれあいハイキング	●					a
11月	飯道寺 笈渡し祭 護摩供	●	●	●			a
	甲南町塩野 円満寺 護摩供	●					b
12月	太郎坊宮お火焚大祭 大護摩供	●	●				b

図表4 飯道山周辺の行者講における年中行事(聞きとり調査を元に筆者作成)

山行者講の講員は儀礼中、祭場内で着席し行事を見守っている。若狭神宮寺お水送りと比叡山延暦寺世界平和祈願祭は多くの観光客が訪れる行事である。そのため、江州飯道山行者講の講員は、これらの行事に参加することで、観光客からの注目を集めることになる。

(d)の行事は主催の行者講がない事例である。この事例は1例のみであって、4月17日におこなわれる水口町水口の古城山水口岡山城跡付近にある阿迦の宮例祭である。阿迦の宮は、水口岡山城の城主を祀っている。

(e)の行事は江州飯道山行者講が関わらない行事である。近江岩上講が主催する3月18日と9月18日におこなわれる岩上山の採燈護摩供、そして、近江岩上講がサポートする4月の滋賀県近江八幡市安土町の福之島弁才天における採燈護摩供である。7月18日におこなわれる甲賀市水口町和野に所在する秋葉神社の例祭は、水口町の江州飯道山行者講以外の行者講が参加する。

(2) 行事における講同士のつながり——古城山阿迦の宮例祭の事例から——

本節では、(d)の行事の事例である古城山阿迦の宮例祭における講同士のつながりを考察する。古城山阿迦の宮例祭において参加する行者講は江州飯道山行者講、水口徳栄講、水口龍王講、近江岩上講の4つであって、江州飯道山行者講信楽講以外の水口町で活動する行者講が関わる行事である。なお、江州飯道山行者講、水口徳栄講、水口龍王講、近江岩上講の水口町で活動する行者講全体を指す名称はないという。

筆者は2019年4月17日におこなわれた古城山阿迦の宮例祭の調査をおこない、各行者講員の役割の分析をおこなった。

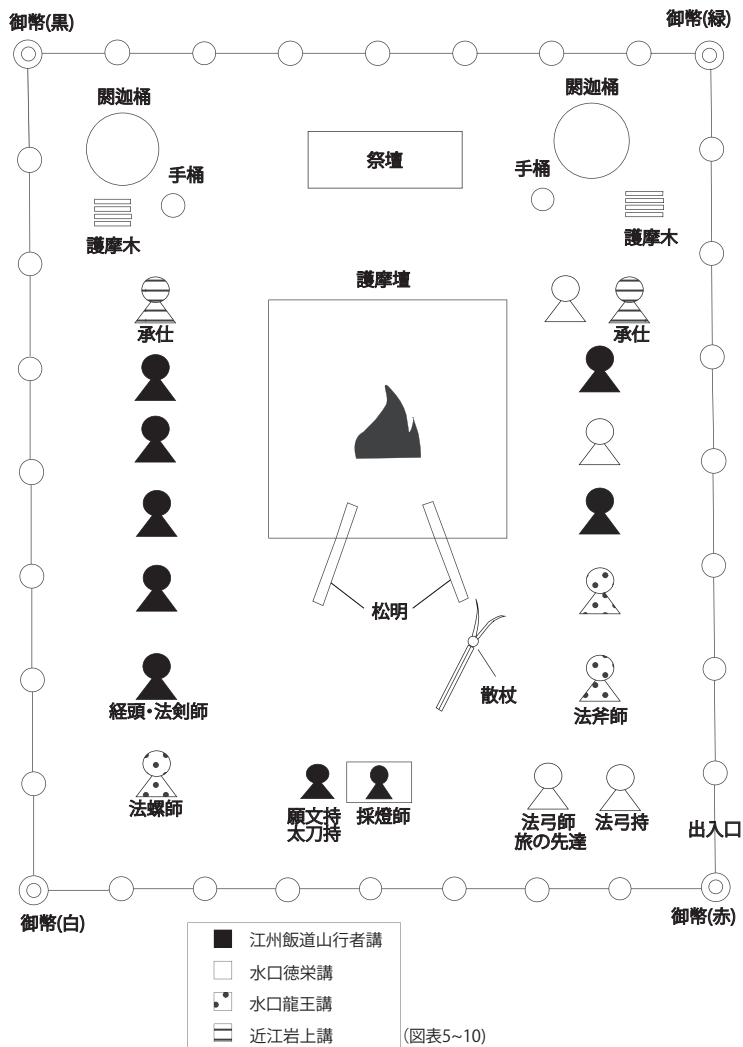
阿迦の宮は享保元年（1716）に大岡寺の奥院として建てられ、その後、慶長5年（1600）に城主長束正家の霊と古城山および水口町の守り神として祭られた。現在の祠は昭和41年（1966）に再建されたものである。

例年、4月17日におこなわれる例祭は、甲賀市観光協会が主体となって実施される。水口宿をよくする会が準備の手伝いを担当する。護摩木は200円で観光客や行者講員、水口町の住民が奉納する。この行事は、水口

町の行事であるので、来賓として、水口岡山城の城主の後裔、甲賀市長、甲賀市の議員、甲賀市商工会、甲賀市郷土史会、水口岡山城の会、飯道山観光協会などが招かれる。また、滋賀県甲賀市のケーブルテレビである「あいコムこうか」の取材として撮影もおこなわれた。行者講としての参加者の内訳は、採燈師は江州飯道山行者講の講元である天台宗の御師が担当し、江州飯道山行者講の講員は9名、水口徳栄講の講員は4名、水口龍王講の講員は3名、近江岩上講の講員は2名であり、採燈師を含めた総計は18名であった。この内訳を見ると、江州飯道山行者講の講員の参加者が最も多い。これは、江州飯道山行者講員の活動可能人数が最も多く、江州飯道山行者講は行事のサポートに適した性格を持つことが明らかである。以下、調査で得られた行事の流れを述べる。

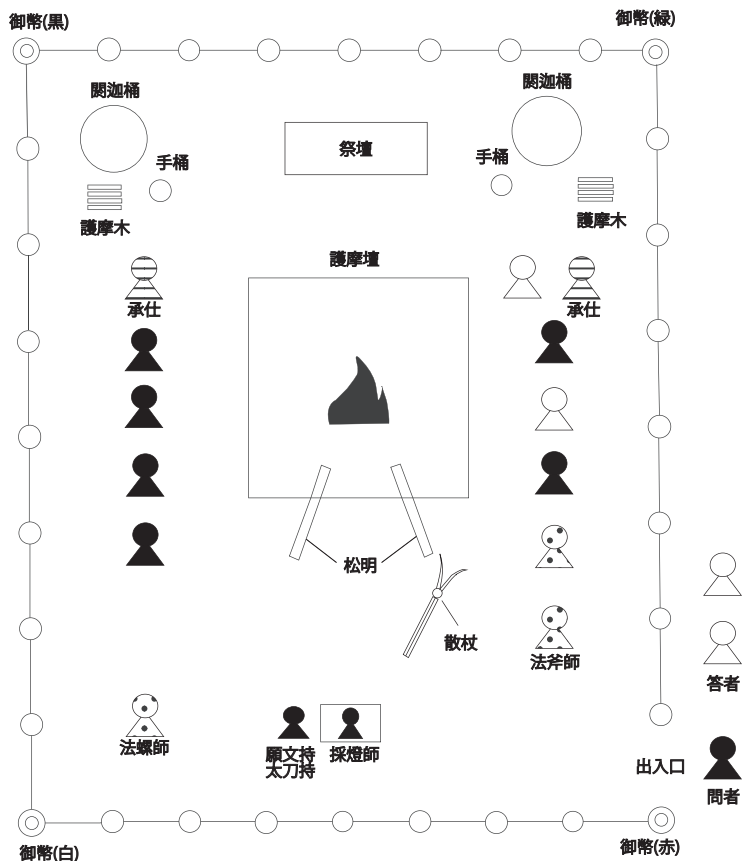
10時頃から、軽トラックなどで行者講員たちが阿迦の宮に集まり始める。古城山の頂上近くに駐車スペースがあり、そこまで行者講員たちは、車で登ってくる。行者講員たちは、集まり始めると「おおきに、やっかいです」というあいさつをかわす。11時ごろに甲賀市観光協会の司会で、会長があいさつをおこなう。次に、市長のあいさつがなされ、水口岡山城の城主の後裔によるご詠歌が奉納される。その後、行者講員らが、祠に参拝する。その際、般若心経を唱える。このとき、僧侶の読経と修験道の行者の読経の早さが異なるため、読経のスピードにズレが生じていた。11時20分ごろ、法螺師が法螺貝を吹きながら先導し、行者が祭場結界を解きに入場する。時計回りに2周回り、配置に着く。図表5は基本配置である。採燈師、法螺師、願文持ち、承仕、経頭は配置が決まっているが、他の行者は特に決まっていない。このとき、行者講による定位置は見られないのである。なお、役職のない行者は読経と護摩木を投入する役割を担う。図表5をみると、採燈護摩供を指導する経頭と採燈師は江州飯道山行者講の講員であるため、儀礼は江州飯道山行者講の天台宗の方針に、他講の真言宗の行者講員たちが従うということになる。

その後、水口徳栄講の講員の2名は祭場に入らない。江州飯道山行者講の経頭の役職を担当している講員が祭場の外に出て、山伏問答が始まる。



図表5 阿迦の宮採燈護摩基本配置 (参与観察調査を元に筆者作成)

山伏問答では旅の行者が祭場入り口で入門を請う。そのとき、「案内申、案内申」という言葉から始まる。問答は、どこの修験者か、来山の目的は何かという問いに始まり、山伏の心得や道具についての説明が問われる。



図表6 山伏問答での講員配置 (参与観察調査を元に筆者作成)

図表6は山伏問答における行者講員の配置である。水口徳栄講の講員2名が、旅の行者の役割を担っている。また、問答は江州飯道山行者講の講員であり、経頭の役割を担当している講員が問者を担当する。ここでは山伏問答でおこなわれる内容を少し述べておきたい。

答 案内申す、案内申す。

問 承け給う、承け給う。旅の行者は何れの修験者にて候。

答 大峰山は龍泉寺修験、近江水口徳栄講配下の修験者にて候。

問 ならば護摩壇に入るには、一通り山伏のことお聞き申す。

答 本日、一通り行者のことわきませ申す。

問 然らば山伏とは。

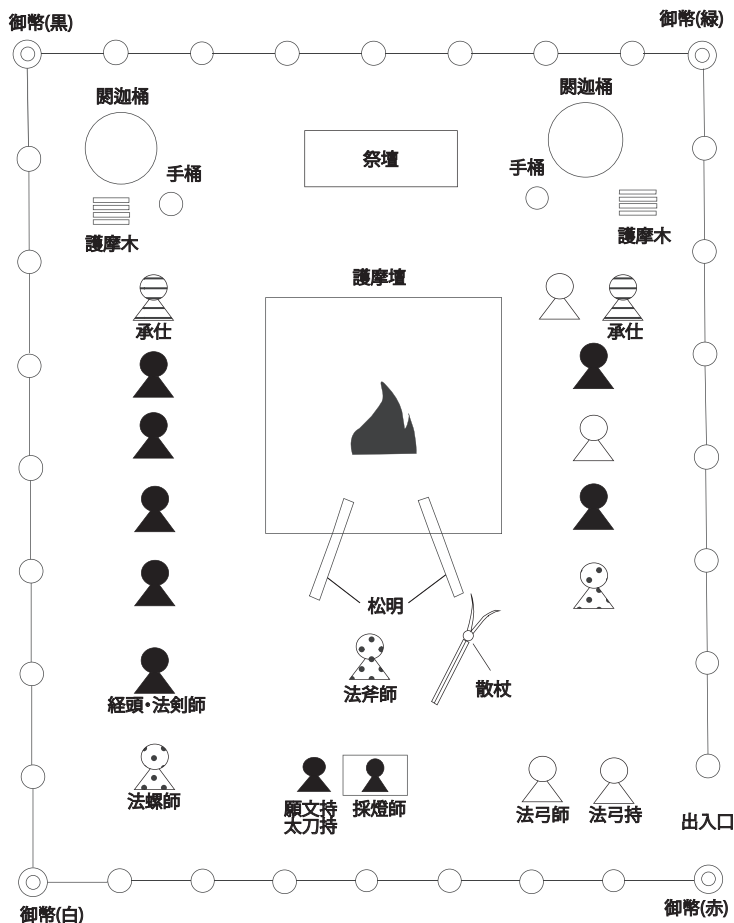
(中略)

はじめに、水口徳栄講の2名のうち、先頭の講員が案内申すと問いかける。この講員は水口徳栄講、講元のM氏である。後ろの講員は笈を背負って待機し、講元の後に続いて入場するのみである。この笈は普段江州飯道山行者講の拠点寺院である飯道寺に保管されており、阿迦の宮例祭以外に飯道寺の笈渡し祭などで使われる。この笈を江州飯道山行者講の講員がこの例祭のために持ってくるのである。山伏の意味や修験者が見につける道具などの説明が問われ、旅の行者である水口徳栄講の講元がそれに答えていく。あくまで、旅の行者というのは、山伏問答をおこなう際の役割であって、水口徳栄講が阿迦の宮例祭において新参の行者ということではない。江州飯道山行者講員である問者の質問が終わると、問者は、「先ほどからいろいろお聞き申したが、それぞれごもつとまでござる。さすが、水口徳栄講のM氏でござるな。どうぞお入りください。」と言い、旅の行者の水口徳栄講の2名を祭場に入場させる。ここで、江州飯道山行者講員が水口徳栄講の講元の名を述べている点については、江州飯道山行者講との区別を図る目的があると考えられる。

次に、法斧作法がおこなわれる。法斧師は斧を持って進み出て、採燈師



写真3 阿迦の宮採燈護摩供の山伏問答 (2019年4月17日筆者撮影)



図表7 法斧作法（参与観察調査を元に筆者作成）

に一礼し、護摩壇に向かい唱える。その後、檀の中央に向かって3回、次に檀の右側、左側でそれぞれ3回、「エイエイアバン」という掛け声を唱え、斧を打ちおろす。これは心身清浄の意味を持っている。法斧作法は、水口龍王講の講員がおこなっている。この阿迦の宮の例祭で法斧作法をおこなった講員は、龍泉寺で、法斧作法の認可を受け、資格を有する講員である。現在のところ、水口龍王講が主催する片添不動尊例祭などの行事に



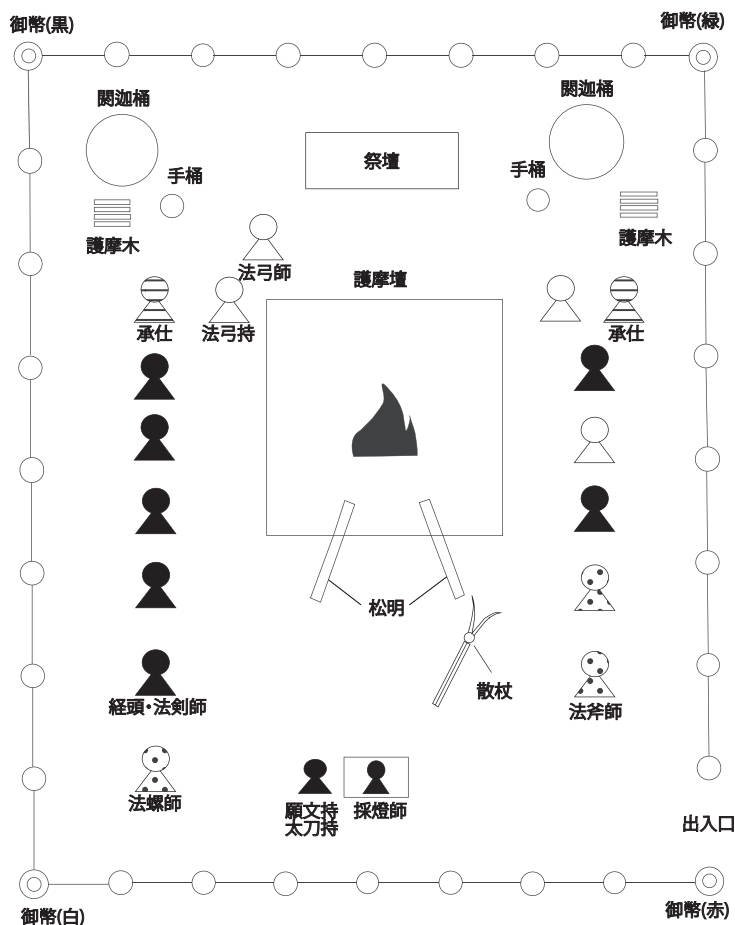
写真4 法斧作法（2019年4月17日筆者撮影）



写真5 法弓作法（2019年4月17日筆者撮影）

において、法斧作法がおこなわれる際は、この講員が担当する姿が見られたのである。法斧作法がおこなわれている間、江州飯道山行者講などの講員は作法をおこなう行者講員のやり方に口を出すことはない。講員の話によると、共同でサポートをしながら行事をおこなう際に、行者講員たちは、「他講は他講のやり方があり、介入しない」という意識があるという。

法斧作法の次におこなわれるのは法弓作法である。作法では、まず、法弓師が弓、矢をとって採燈師の前に進み一礼、そのあと、護摩壇正面で一礼ののち、「それいれば神力加持の法弓と云者…」と法弓の文を唱える。



図表 8 法弓作法 講員配置 (参与観察調査を元に筆者作成)

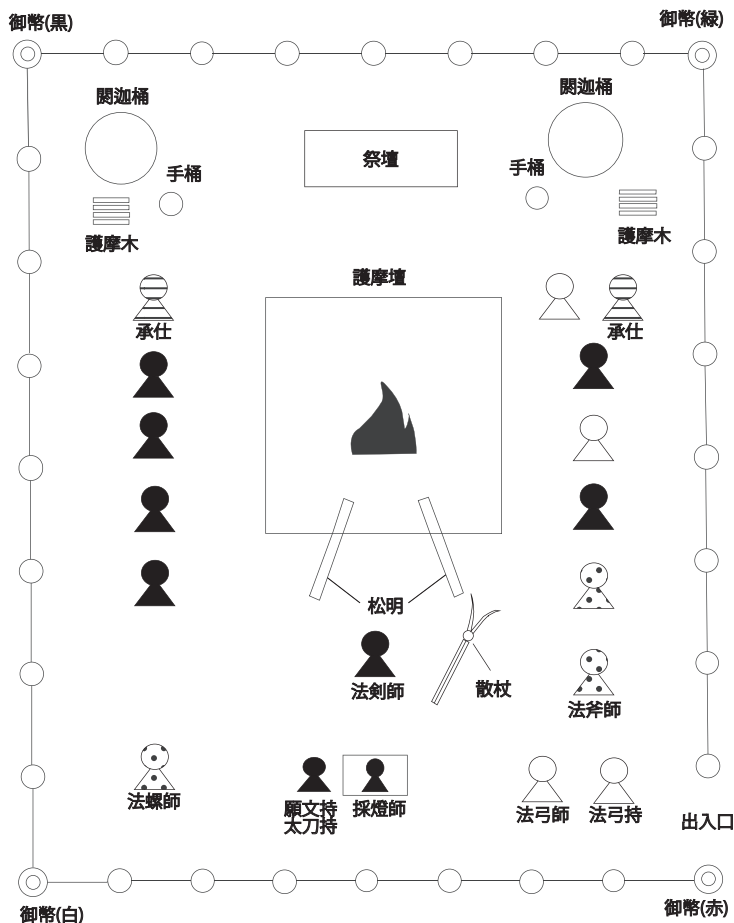
そして唱え終わると道場を右周りに、東、南、西、北、中央、鬼門の順に五大明王の名を唱え、6色6本の矢を放つ。これは飛矢により道場を取りまく諸魔を払い、同時に本尊不動明王をはじめ、五大明王の垂迹である青帝大神竜王などに、道場を護り秘法成就をたすけ給えと願う。図表8は法弓作法における行者講員の動きである。法弓作法では、水口徳栄講の講員2名が担当する。この2名は、先におこなわれた山伏問答を担当した行者



写真6 法剣作法（2019年4月17日筆者撮影）

講員と同じ人である。水口徳栄講の講元が矢を放ち、山伏問答で笈を背負っていた行者講員が矢を講元に渡す役割を担っている。放たれた矢は通常であれば、斜め上方向に曲線を描くように放たれる。しかしながら、阿迦の宮例祭や12月におこなわれる太郎坊お火焚大祭のような、一般の参拝者が祭場の周りにたくさんいる場合については、矢が観光客に当たらないように、地面に向かって放たれるのである。一方で、一般の参拝者の中には、法弓作法で放たれる矢を目当てに訪れる人々も数なからず存在する。矢を持って帰ると魔除けになるという。もし、誰に手にも渡らなかった矢があれば、行者講員が参拝者や住民に渡す姿が見られる。

3つの作法のうち、阿迦の宮例祭において最後におこなわれるのが法剣作法である。なお、法剣作法の次に法螺作法をおこなう採燈護摩供もあり、年中行事の中で、飯道神社例祭や飯道寺笈渡し祭などでみられる。法剣作法では、法剣師は法剣持者より法剣を受け取り、採燈師に一礼、その後護摩壇に向かい、右手で剣を抜いてこれを構え、「夫れ以みれば金剛法剣と云者…」と法剣の文を唱える。2019年4月17日の阿迦の宮例祭においては、江州飯道山行者講の講員が法剣作法を担当した。図表9は法剣作法における講員の動きである。この行者講員は、経頭の役割を担っている。法剣作法の際、他の行者講員に動きはない。作法をおこなう講員は経頭であるの



図表9 法剣作法 講員配置 (参与観察調査を元に筆者作成)

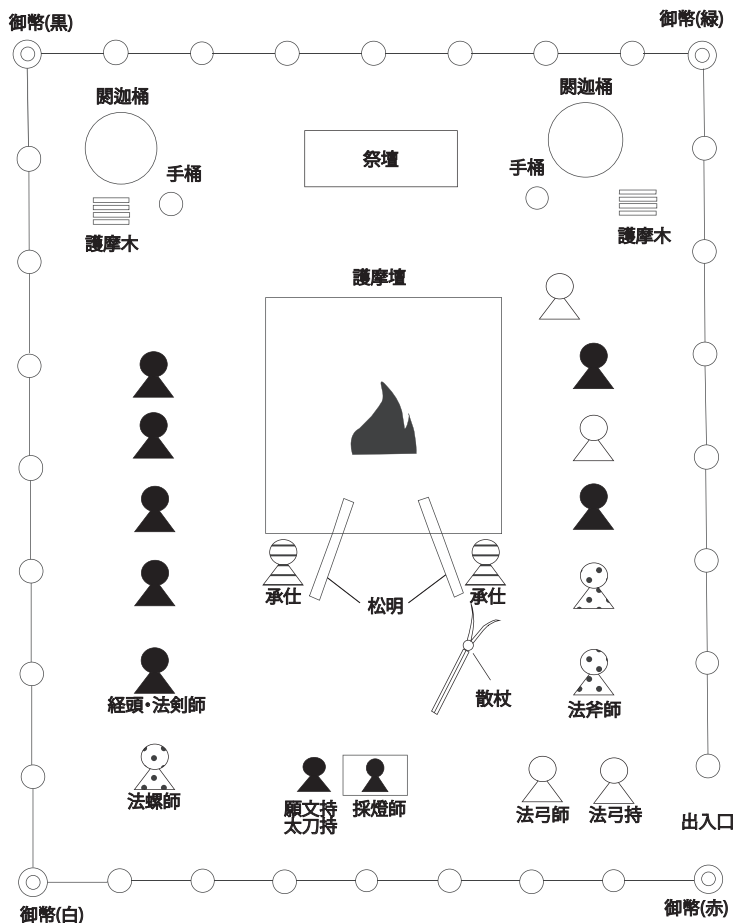
で、採燈護摩供において作法が代わる際に、法螺師が法螺貝を吹くと経頭が作法名を述べ、次の作法へと移る。つまり、法剣作法においては経頭と作法師と同じ講員であるため、自ら作法名を述べ、法剣作法をおこなうのである。また、通常、経頭は作法師を兼ねる必要はないが、江州飯道山行者講、水口徳栄講、水口龍王講、近江岩上講の中で、法剣師の認可を受け資格を有する行者のうち、最も採燈護摩供において法剣作法の経験がある

講員のため、江州飯道山行者講の経頭が法剣作法を担当するのである。

作法が全て終了すると、それぞれの行者講員は護身法を結ぶ。次に、採燈師が願文を読み、承仕が点火をおこなう。承仕2名は松明を取って、宝前の灯を点じて護摩壇前で組みあわす。その後、採燈師が護摩供の目的を述べる。このとき、行者講員は全員起立し、採燈師は願文持者を従え、願文を読む。承仕は採燈師が願文を読み終わると、採燈師と行者講員が着席したのち、檀の前後に分かれ、松明を大きく右に3回まわして下部より護摩壇に点火する。経頭は錫杖を振り、読経の指揮をとる。採燈師の儀礼が終わるまで、観音経偈、般若心経、諸真言、祈願がなされる。図表10は承仕点火の際の承仕の動きである。これを見ると、近江岩上講の講員2名が承仕を担当していることがわかる。承仕は特に、本山の許可など特別な資格は必要ない。

点火後、採燈師作法がおこなわれる。採燈師の作法においては修法を火天段、本尊段、諸尊段の三段にわけると、各段で散杖、小木を使う。立って散杖をとり、護摩壇の前を左右に移動して散杖の先端を檀にあて、採燈師の隣にいる行者が差し出す小木を法剣でとり、檀に投げ入れる。そして火扇をもって仰ぐ。一連の採燈師による作法が終了すると、法螺師が法螺を吹き、採燈師が破檀の所作をおこない、採燈護摩の儀礼が終了となる。そして法螺師が先導して退場するのである。

以上、2019年4月17日におこなわれた阿迦の宮例祭について、採燈護摩供におけるそれぞれの行者講員の動きに着目して分析をおこなった。法斧作法、法弓作法、法剣作法、承仕においては、江州飯道山行者講、水口徳栄講、水口龍王講、近江岩上講の4つの行者講がそれぞれ平等に担当していることが明らかとなった。また、経頭、採燈師を江州飯道山行者講が担当することにより、江州飯道山行者講の天台宗におけるやり方となり、いわゆる、他のサポートに来た行者講員の言う「飯道山流」である。読経においては般若心経や不動明王などの真言において、読み方が行者講によって少し異なっている点が見られる。しかしながら、水口徳栄講の講員によると、「それは大きな違いはないから、特に気にしてへんねや」と言う。



図表10 承仕点火時の講員配置（参与観察調査を元に筆者作成）

実際に、江州飯道山行者講の読経に統一されているように聞こえるのである。

現在の阿迦の宮例祭の主催は甲賀市観光協会である。観光協会が主催であるからこそ、阿迦の宮例祭は観光要素としての修験道行事の役割があると考えられる。

4 結論と課題

江州飯道山行者講は昭和25年（1950）から昭和27年（1952）にかけて再興された新しい行者講である。また、比叡山延暦寺直轄の行者講となったため、本山からのつながりが強く、行者講員が昇進しやすい環境にあった。また、新しい行者講でありながらかつての飯道山修験道の勢力を維持するかのよう、他講が主催する行事において重要な役職を担っているのである。様々な行事をサポートし、つながりを構築していくことで行事の衰退を防いできたと考えられる。

以上、本稿では、江州飯道山行者講の性格や講同士のつながりについて考察してきた。次の課題として、行者講の内部におけるつながりや個人同士のつながりについて分析し、行者講におけるネットワークの全体図を明らかにしていく必要があるだろう。この点はまた稿を改めて論じたい。

【謝辞】

本稿のための調査にあたって、江州飯道山行者講総務山田耕造氏、関谷和久氏、講元梅田義将氏、水口徳栄講元村田稔氏をはじめ、水口龍王講、近江岩上講、江州飯道山行者講信楽講の講員の皆さまに大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

【注】

- 1) 本稿は、筆者が2020年1月に滋賀県立大学大学院に提出した修士論文「現代の行者講における個人とネットワーク——江州飯道山行者講を中心に——」の一部である。
- 2) 修験道は宮家準の定義が代表的である。宮家によると、修験道は、日本古来の山岳信仰が、シャーマニズム・仏教・道教・神道などの影響のもとに、平安時代後期に一つの宗教形態をとるに至ったものであり、この宗教は山岳修行と、その結果獲得した超自然的な験力を用いて行なう呪術宗教的な活動の2つの局面を有している。（中略）また、霊地とされた山岳で修行した呪術宗教者が治病・防災などの超自然的な力をもつ者として畏怖され、彼らはその力を用いて、山中の諸神諸霊を操作したり、託宣などの巫術的な活動を行なったりしていたと述べている（宮家 1999：5）。
- 3) 白川琢磨は、修験道の概念について問題提起をしている。白川は、九州の六郷満

山をフィールドに調査をおこない、修験研究の枠組みには適合しない歴史的に蓄積された実践経験の集約があり、修験道と呼ばれる実践概念としての民俗宗教が存在するのではなく、そこにあるのは顕密のハビトゥスという生きた実践の集約が存在するだけではないかと論じている（白川 2018：4）。

- 4) 現地調査は『日本民俗学会倫理綱領 倫理綱領にもとづく調査・研究の指針』に基づく。

【参考文献】

- 天田顕徳 2014「講の社会的位置づけの変遷、および講研究の射程に関する一考察」長谷部八朗編『「講」研究の可能性Ⅱ』慶友社
- 梅田吉治・中西新二 1989『修験道金奇山飯道寺』金奇山飯道寺
- 甲賀市史編さん委員会編 2007『甲賀市史』第1巻 古代の甲賀 甲賀市
- 甲賀市史編さん委員会編 2012『甲賀市史』第2巻 甲賀衆の中世 甲賀市
- 甲賀市史編さん委員会編 2016『甲賀市史』第8巻 甲賀市事典 甲賀市
- 櫻井徳太郎 1962『講集団成立過程の研究』吉川弘文館
- 修験道修行大系編纂委員会編 1994『修験道修行大系』国書刊行会
- 白川琢磨 2018『顕密のハビトゥス 神仏習合の宗教人類学的研究』木星社
- 鈴木正崇 2015『山岳信仰 日本文化の根底を探る』中公新書
- 湯紹玲 2016「盆棚に関する活動からみるイエの盆行事の現代的な変化：滋賀県甲賀市信楽町多羅尾の初盆を事例に」『人間文化 滋賀県立大学人間文化学部研究報告』第40号 滋賀県立大学人間文化学部
- 渡邊欣雄 2016「講中のにぎわい——もう一つの都市コミュニティ——」『都市民俗研究』21 國學院大學
- 長谷部八朗 2016「講集団の存続」『「講」研究の可能性Ⅲ』慶友社
- 長谷部八朗 2013『「講」研究の可能性』慶友社
- 満田良順 1975「飯道寺の修験道について」『近江地方史研究会』第2号
- 満田良順 1978「飯道山の修験道」五来重編『近畿霊山と修験道』山岳宗教史研究叢書 11 2000年 初版は1978年
- 宮家準 1999『修験道儀礼の研究』春秋社
- 宮本袈娑雄 1984『里修験の研究』吉川弘文館